

スペイン語ガイドブック

命令文

●命令文

命令文は必ずしも命令するときだけに使われるわけではありません。命令の他に依頼や勧誘などの意味もあります。一人称単数 (yo) の命令文はありません。一人称複数の命令文は「…しよう (しましよう)」という勧誘の意味になります。

●肯定の命令文

二人称では命令形を使い、一人称と三人称では接続法現在を用います。

*	単数	複数
一人称	なし	接続法現在
二人称	命令形	命令形
三人称	接続法現在	接続法現在

* 二人称の命令形はふつうの言い方。usted には接続法現在を使います。

- ¡Canta! // 歌って!
- ¡Cante! // 歌ってください!

●二人称命令形

二人称単数の命令形は直説法現在三人称単数形と同じ形です。

- ¡Canta! // 君歌って!

二人称複数の命令形は不定詞の語尾の r の代わりに d をつけた形です。

- ¡Cantad! // 君たち歌って!

その他の人称では接続法を用います。

- ¡Canten! // あなた方、歌ってください!

●弱勢代名詞

直接目的語、間接目的語、再帰代名詞は肯定命令文では代名詞を動詞の後に直

接つけます。

- ¡Escríbeme! // 私に手紙を書いて。

肯定命令形のアクセント符号に注意

¡Escribe!というだけの命令形ならば終わりから 2 番目の音節に強勢があるのでアクセント符号をつけません。ところが、me を付加することで強勢の位置が終わりから 3 番目の音節に変わるのでアクセント符号が必要になります。

再帰動詞の肯定命令文

一人称複数では動詞の語尾の-s が消失することと、二人称複数では命令形の語尾の-d が消失することに注意しましょう。

- ¡Levantémonos! × ¡Levantémosnos! // 私たちは起きましょう。
- ¡Levantaos! × ¡Levantados! // 君たちは起きなさい。

●命令形の不規則変化

次の 8 つの動詞は二人称単数の命令形はで短縮された形になります。

- poner 置く → pon
- tener 持つ → ten
- venir 来る → ven
- salir 出る → sal
- hacer する。作る → haz
- deci 言う → di
- ir 行く → ve
- ser …である → sé

- Pon estas cajas sobre la mesa. // この箱をテーブルの上に載せて。◇ caja 箱 ; sobre …の上に ; mesa テーブル
- Ten mucho cuidado. // よく気をつけて。◇ cuidado [男名] 注意
- vente a mi casa. // 僕の家に来て。◇ vente < venirse [自動] 来る (☆venir より到着点に達することが強調される)
- Dime la verdad, por favor. // どうか本当のことを言って。◇ dime < di + me; verdad 真実、本当のこと ; por favor お願いだから。

●否定の命令文

*すべての人称で接続法現在を用いる。

*代名詞（直接目的語・間接目的語・再帰代名詞）は動詞の前に置く。

*	単数	複数
一人称	なし	接続法現在
二人称	接続法現在	接続法現在
三人称	接続法現在	接続法現在

- No lo pongas aquí. // それをここに置かないで。(二人称)
- No se quede allí. // あそこにはいないでください。(二人称)
- No te preocupes. // 心配しないで。(二人称)

●再帰動詞の命令文

(1) quedarse の肯定命令

*	単数	複数
一人称	なし	Quedémonos
二人称	Quédate	Quedaos
三人称	Quédese	Quédense

(2) quedarse の否定命令

*	単数	複数
一人称	なし	No nos quedemos.
二人称	No te quedes.	No os quedéis.
三人称	No se quede.	No se queden.

スペイン語の質問

*** 命令文ではいつも感嘆符をつけないてはいけませんか？**

→感嘆符がつくことが多いですが、つけないときもあります。

*** 1人称複数や3人称の命令形を使うのはどういう状況なんですか？**

→usted, ustedes に対する命令(依頼)の場合です。「あなたが…するように」(望む)という意味で、接続法が使われます。また, nosotros は「私たちは…しましょう」という勧誘の意味になります。

*** 命令文で二人称複数の時 d を発音しないから、単数と同じになると思います。そうしたらどうやってききわけるんですか？**

→canta は can に強勢があり, cantad は tad に強勢があります。確かに語末の d は消えやすいのですが, 強勢の位置で tú に対する命令か vosotros に対する命令かの区別ができます。

*** たとえば、日本語だと「食べろく食べろく食べなさい。。。<お召し上がりください」となるのに、スペイン語だと come, coma とほとんど「音」としての聞こえ具合に違いがない？**

→日本語は典型的に要素が次々に繋がっていくタイプの言語です。これを「膠着型言語」と言います。一方スペイン語は語形が変化します。これを「屈折型言語」と言います。このようにタイプが異なるので興味深い比較ができます。

*** 命令形に関して、どうしても人称によって現在形と同じ形になってしまうように思うのですが。**

→その通りです。二人称単数の命令形は直説法現在 3 人称単数と同じになります。一部の例外もありますから気をつけましょう。

*** 命令法はいろいろな場面で使える重要だと思いましたが、もっと丁寧に頼む表現はないのでしょうか？ちょっとぶっきらぼうになりすぎると思います。**

→丁寧に依頼するときにはたとえば Haga el favor de ...のようにさまざまな表現があります。1年生の授業で基礎力をつけたら, 2年生の授業で表現力をつけてください。

*** たとえば Sé la persona que siempre dice la verdad.のような文があったら、「いつも真実を言う人を私は知っている」なのか、「いつも真実を言う人であれ」なのかは、文脈でしか判断できないのですか？**

→確かに sé は saber の命令形で「…になりなさい」という意味になります。一方「ある人を知っている」では saber ではなくて、conocer が使われますので混同はありません。

スペイン語の理由

*** なぜ「命令形」の活用の形に接続法が表れるのですか？願望などが表れるからでしょうか？**

→この問題は「なぜ2人称だけ形が異なるのか」ではなく、なぜ 1,3 人称で接続法が使われ、また、否定文でも接続法が使われるのか、という問題にしたほうが説明しやすいのでそのように変えます。スペイン語の2人称の肯定命令形は歴史的には、ラテン語の命令形(2人称しかありませんでした)をそのまま継承しているからです。一方、1人称複数と3人称単数・複数「…であるように(望む)」という従属文に起きる接続法と同じで、「望む」の部分がないだけです(願望文と似ています)。

*** よく使われている(命令形の) poner, tener, venir, hacer, ir などが短いのは、やはり長い間にそうなったのですか？二人称だけ複雑になっているのは、命令形では二人称が一番多く使われるために例外ができてしまったためですか？**

→命令形が不規則なのはすべて er, ir 動詞です。er, ir 動詞は命令形の語尾-e が弱勢であるため脱落しました。この現象は中世では命令形に限らず一般に t, d, n, l, s, z の後の e が脱落したのですが、この脱落形の中でとくに poner, tener, venir, salir, hacer, decir だけが現代まで保持されました。これらの動詞は命令形で1音節になったので、「命令」という意図がとくに表情豊かに表現できるようになった、と考えられます。一般の他の動詞は全体の傾向に従って同一の形に合流し、規則的になりました。

*** 英語ではたとえば I call you.のように人称代名詞は動詞の後にきます。スペイン語で Te llamo.のように代名詞が動詞の前にくるのはどうしてですか。**

→ラテン語では直接・間接目的語の代名詞はふつう動詞の後にきていました¹。中世スペイン語の時代になると代名詞に強勢がなくなり²、動詞や他の強勢語の後ろにくっついて使われるようになりました。強勢語の前につくのではなく後につくことが多かったのは、弱勢語で文をはじめるのを一般に嫌ったため、そしてラテン

¹ これは後期ラテン語の特徴です。「動詞+代名詞」という語順は「前置詞+代名詞」という語順と平行するので、同じ原則が働いていたと思います。代名詞は先行する要素に言及するとき、文頭にあらわれる傾向がありました。cf. Pinkster (1995: 221). これも自然なことだと思います。

² ラテン語の代名詞は強勢語であったようです。cf. Molina Yébenes (1993:16)

語以来の語順に従っていたためだと思います。そして近代スペイン語になると、強勢語がなくても³、とくに口語で代名詞を前に出して話題にしたり強調したりするようになりました⁴。それがさらに一般化して現代語の語順、つまり「代名詞＋動詞」に落ち着きました⁵。

*** なぜ肯定命令文だと代名詞が動詞の後ろにきて、否定命令文だとそれが動詞の前にくるのですか。なにか理由があるのですか。**

→肯定命令文と否定命令文の一番大きな違いは後者に否定語があることです。これが代名詞の位置の条件になりました。「代名詞」の項で説明しましたように、ラテン語では「動詞＋代名詞」、中世スペイン語では「動詞＋代名詞」または「強勢語＋代名詞＋動詞」、現代スペイン語では「代名詞＋動詞」という語順になりました。中世スペイン語では、代名詞が弱勢となったので強勢語の後につく傾向がありましたが、否定命令文では *no* がその強勢語の役目を果たして代名詞を引きつけます。肯定命令文では動詞の命令形が代名詞を引きつけたので、代名詞は動詞の後にきます。

*** 代名詞のところで習ったのですが、スペイン語では「代名詞＋動詞」の語順になります。それなのに、どうして *comiéndolo* とか *comerlo* のように、動詞が現在分詞や不定詞だと「動詞＋代名詞」の語順になるのですか。**

→「代名詞」の項で説明しましたように、ラテン語では「動詞＋代名詞」、中世スペイン語では「動詞＋代名詞」または「強勢語＋代名詞＋動詞」、現代スペイン語では「代名詞＋動詞」となりました。中世スペイン語では、代名詞が弱勢となったので強勢語の後につく傾向がありましたが、「現在分詞＋代名詞」という語順はその傾向に由来します。つまり現在分詞が強勢語なのでそれにくっついたのです。不定詞と肯定命令形でも同じです。

*** なぜ肯定命令形は直説法現在 3 人称単数形が使われるのですか。2 つはとくに関係がないと思うのですが。**

→この 2 つは別々の語源にさかのぼります。ラテン語の命令形は動詞の語幹だけ、つまりとても短い形式で使っていました。命令形がこのように短かかったのは、それが呼びかけのような間投詞の役割を果たしていたためだと思います⁶。一方、直説法現在 3 人称単数形には *t* という語尾があったのですが、これはスペイン語

³ 「*no*・副詞句＋代名詞＋動詞」という語順に合わせて揃えたのかも知れません。

⁴ Eberenz (2000:138). 文頭には話題を掲げ、一方、文末にはその話題に関するコメントや新情報を載せる、という基本的な構造をここで確認しておくといよいでしょう。

⁵ 現在分詞、不定詞、肯定命令文では「動詞＋代名詞」となります。その理由については「動詞」や「文」の項を見てください。

⁶ cf. Hofmann (1963: 338-9), Meillet et Vendryes (1968: 142). スペイン語の ¡Mira!, ¡Venga! などの使い方もそれに似ています。

の音韻変化によってなくなってしまいました。その結果、肯定命令形と直説法現在 3 人称単数形が同じ形になったのです。

*** なぜ肯定命令文だけで特殊な命令形が使われるのですか。肯定命令文で接続法を使ってもよいような気がするのですが。**

→確かにその通りです。実は、ラテン語の時代には 2 人称単数の肯定命令形で接続法が使われている例もありました⁷。しかし、命令（依頼）は典型的に話す相手に向かってするものなので、その特別な用法が発達してそれが専用に使われたようです。なお、2 人称複数形の *cantad, comed, vivid* などの *d* はラテン語では *te* という形でした (*ama:te, audi:te*)。これが 2 人称複数の原形で、*Lat. ama:tis, audi:tis* (> *Sp. amáis, oís*) の *tis* はこの *te + s* にさかのぼります⁸。*s* は 2 人称を示す印だったとすれば、やはり、命令形は間投詞のように短い形をとったことがわかります。

*** なぜ否定命令文で命令形が使われないのですか。肯定命令文で使われるのなら、否定文でも使ってよいような気がします。**

→実は、ラテン語で「*ne*:+命令形」という形も使われていました。他にも、*ne*:+接続法現在、*cave*+接続法完了、*ne*+接続法完了、*no:li*:+不定詞という形もありました⁹。*ne*:+接続法現在は日常語に使われていたということなので、これが後でスペイン語の *no*+接続法になったのだと思います。肯定文では命令形が使われ続けたのは、頻度が高かったためでしょう。頻度が低い否定文では、「…しないように（望む）」という意味でも使われた *ne*:+接続法現在が否定命令文でも使われるようになったのは、ちょうど日本語でも「…しないように。」という形で禁止を示す否定命令文となるのと同じだと思います。

*** *ten, ven, sal* などの短い不規則形はどうしてできたのですか。直説法現在 3 人称単数形と微妙に違っているのはなぜですか。**

→ラテン語の 2 人称単数の命令形に由来する中世スペイン語の命令形の語末は *ar* 動詞ならば *a*、*er/ir* 動詞ならば *e* でした。このうち語末の *e* は、一般に脱落する傾向があったため、*ten*¹⁰、*ven*、*sal* などの形となりました。これは一般的な音声現象なので中世では他の動詞にも短縮形が生まれましたが、その中で頻度の高い動詞だけが現代スペイン語にも残ったようです。単音節になったのは、こうした物理的な原因だけでなく、命令や指示を簡潔に示そうとする意図が働いたことも考えられるでしょう¹¹。

tiene – ten, viene – ven を見ると、3 人称単数形では二重母音化しているのに、命

⁷ cf. Bassols de Climent (1981: I, 317).

⁸ cf. 高津(1954: 273), Monteil (2003: 381).

⁹ cf. Collart (1968: 139), Calero (2003: 117)..

¹⁰ cf. Lloyd (1993: 501-2).

¹¹ cf. Alvar y Pottier (1983: 209).

令形ではしていません。ven はラテン語の ve:ni:に由来するので、長母音 e:がそのまま保たれたのです。ten は tene:に由来するので（短母音は二重母音化します）、tiene になりますが、tien という形がありましたが、これは ven の影響（類推）を受けて、ten となりました¹²。

*** なぜ 2 人称だけ形が異なり、肯定命令と否定命令でこの活用の仕方が変わっているのでしょうか？**

→否定命令で接続法が使われるのは、ラテン語の否定の接続詞 NE（…でないように）が使われていたためです。このラテン語の NE(接続詞)がスペイン語の no(副詞)に対応することになりました。このように起源としては従属節（接続詞に導かれるので）だったので、「…でないことを(望む)」という意味(願望)で接続法が使われるのです。

*** なぜ肯定命令文だと代名詞が動詞の後ろにきて、否定命令文だとそれが動詞の前にくるのですか。なにか理由があるのですか。**

→肯定命令文と否定命令文の一番大きな違いは後者に否定語があることです。これが代名詞の位置の条件になりました。「代名詞」の項で説明しましたように、ラテン語では「動詞＋代名詞」、中世スペイン語では「動詞＋代名詞」または「強勢語＋代名詞＋動詞」、現代スペイン語では「代名詞＋動詞」という語順になりました。中世スペイン語では、代名詞が弱勢となったので強勢語の後につく傾向がありましたが、否定命令文では no がその強勢語の役目を果たして代名詞を引きつけます。肯定命令文では動詞の命令形が代名詞を引きつけたので、代名詞は動詞の後にきます。

*** なぜ肯定命令形は直説法現在 3 人称単数形が使われるのですか。2 つはとくに関係がないと思うのですが。**

→実は、この 2 つは別々の語源にさかのぼります。ラテン語の命令形は動詞の語幹だけ、つまりとても短い形式で使っていました。命令形がこのように短かかったのは、それが呼びかけのような間投詞の役割を果たしていたためだと思われま
す¹³。一方、直説法現在 3 人称単数形には t という語尾があったのですが、これはスペイン語の音韻変化によってなくなってしまいました。その結果、肯定命令形と直説法現在 3 人称単数形が同じ形になったのです。

*** なぜ肯定命令文だけで特殊な命令形が使われるのですか。肯定命令文で接続法を使ってもよいような気がするのですが。**

→確かにその通りです。実は、ラテン語の時代には 2 人称単数の肯定命令形で接

¹² cf. Lloyd (1993: 501).

¹³ cf. Hofmann (1963: 338-9), Meillet et Vendryes (1968: 142). スペイン語の ¡Mira!, ¡Venga!などの使い方もそれに似ています。

続法が使われている例もありました¹⁴。しかし、命令（依頼）は典型的に話す相手に向かってするものなので、その特別な用法が発達してそれが専用に使われたようです。なお、2人称複数形の *cantad*, *comed*, *vivid* などの *d* はラテン語では *te* という形でした (*ama:te*, *audi:te*)。これが2人称複数原形で、*Lat. ama:tis*, *audi:tis* (> *Sp. amáis*, *oís*) の *tis* はこの *te + s* にさかのぼります¹⁵。*s* は2人称を示す印だったとすれば、やはり、命令形は間投詞のように短い形をとったことがわかります。

*** なぜ否定命令文で命令形が使われないのですか。肯定命令文で使われるのなら、否定文でも使ってよいような気がします。**

→実は、ラテン語で「*ne*:+命令形」という形も使われていました。他にも、*ne*:+接続法現在、*cave*+接続法完了、*ne*+接続法完了、*no:li*:+不定詞という形もありました¹⁶。*ne*:+接続法現在は日常語に使われていたということなので、これが後でスペイン語の *no*+接続法になったのだと思います。肯定文では命令形が使われ続けたのは、頻度が高かったためでしょう。頻度が低い否定文では、「…しないように（望む）」という意味でも使われた *ne*:+接続法現在が否定命令文でも使われるようになったのは、ちょうど日本語でも「…しないように。」という形で禁止を示す否定命令文となるのと同じだと思います。

*** *ten*, *ven*, *sal* などの短い不規則形はどうしてできたのですか。直説法現在3人称単数形と微妙に違っているのはなぜですか。**

→ラテン語の2人称単数の命令形に由来する中世スペイン語の命令形の語末は *ar* 動詞ならば *a*, *er/ir* 動詞ならば *e* でした。このうち語末の *e* は、一般に脱落する傾向があったため、*ten*¹⁷, *ven*, *sal* などの形となりました。これは一般的な音声現象なので中世では他の動詞にも短縮形が生まれましたが、その中で頻度の高い動詞だけが現代スペイン語にも残ったようです。単音節になったのは、こうした物理的な原因だけでなく、命令や指示を簡潔に示そうとする意図が働いたことも考えられるでしょう¹⁸。

tiene – ten, *viene – ven* を見ると、3人称単数形では二重母音化しているのに、命令形ではしていません。*ven* はラテン語の *ve:ni*:に由来するので、長母音 *e*: がそのまま保たれたのです。*ten* は *tene*: に由来するので（短母音は二重母音化します）、*tiene* になりますが、*tien* という形がありましたが、これは *ven* の影響（類推）を受けて、*ten* となりました¹⁹。

¹⁴ cf. Bassols de Climent (1981: I, 317).

¹⁵ cf. 高津(1954: 273), Monteil (2003: 381).

¹⁶ cf. Collart (1968: 139), Calero (2003: 117)..

¹⁷ cf. Lloyd (1993: 501-2).

¹⁸ cf. Alvar y Pottier (1983: 209).

¹⁹ cf. Lloyd (1993: 501).

参考文献

- Alvar, Manuel y Pottier, Bernard. 1983. *Morfología histórica del español*. Madrid: Gredos.
- Bassols de Climent. 1981. *Sintaxis latina*. I, II. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Calero, Francisco. 2003. *Sintaxis latina*. Madrid: Librería UNED.
- Collart, Jean. *Grammaire du latin*. Paris: Presses Universitaires de France. 有田潤訳『ラテン文法』東京：白水社.
- Eberenz, Rodolf. 2000. *El español en el otoño de la Edad Media. Sobre el artículo y los pronombres*. Madrid: Grados.
- Hofmann, J. B. 1963. *Lateinische Syntax und Stilistik*. Neu bearbeitet von Anton Szantyr. München: Beck'sche Verlagsbuchhandlung.
- 高津春繁. 1954. 『印欧語比較文法』東京：岩波書店.
- Lloyd, Paul M. 1993. *Del latín al español. I. Fonología y morfología histórica de la lengua española*. Versión española de Adelino Álvarez Rodríguez. Madrid: Gredos.
- Meillet, A. et J. Vendryes. 1968. *Traité de grammaire comparée des langues classiques*. Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion
- Molina Yébenes, José. 1993. *Iniciación a la fonética, fonología y morfología latinas*. Edición preparada por Esperanza Borrel Vidal. Barcelona: Universidad de Barcelona.
- Monteil, Pierre. 2003. *Elementos de fonética y morfología del latín*. Traducido por Concepción Fernández Martínez. Sevilla: Universidad de Sevilla.
- Pinkster, Harm. 1995. *Sintaxis y semántica del latín*. Traducido por M. Esperanza Torrey y Jesús de la Villa. Madrid: Ediciones Clásicas.